

新たな 連携へ

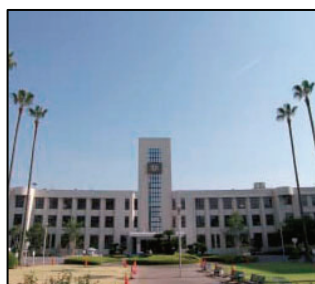
学際的連携

学内異分野連携のスキーム構築

キーワード：研究交流・異分野連携・医工連携・広域連携・外部資金獲得

本事例の関係者

大阪市立大学研究教員
医学部研究教員
理系学部研究教員
同産学官支援事務部門
同新産業
創生研究センター
文部科学省産学官連携
コーディネーター



杉本キャンパス

企画から交流会 開催に至る流れ

平成19年4月～
学内、各学部の
コンセンサス創り
平成19年9月
第1回開催
平成20年2月
第2回開催
平成20年8月
第3回開催

異分野連携、学内から広域連携への展開へ

【要約】

コーディネーターは医学部での研究者の研究活動を支援し、研究成果の実用化を促進するため、異分野連携により発掘された研究シーズの育成、創造を行なうスキーム構築を行なった。具体的には先ず学内の異分野連携、すなわち、理系学部（理学、工学、生活科学部）の研究者と医学部の研究者の交流会を設置した。

当会の主催は本学産学官連携組織「新産業創生研究センター」とし、「インターキャンパス研究交流会」と呼称することとした。第1回を平成19年9月に、医学部キャンパスで実施以来、3回（～平成20年8月）実施し、かなりの連携研究実績が得られた。

【きっかけ】

コーディネーターは本部、他学部とは異なるキャンパスに立地する医学部、同附属病院での産学官連携活動全体について、本部機関と協議しつつ、その制度制定、運用を行ってきた。その活動の最も基本的な一つである医学研究者シーズの発掘活動の中で、医療現場でのシーズ/ニーズの実用化のためには異分野の研究者の協働作業が必要で、かつ有効なケースがあるとの認識を得た。

このため学外との連携研究探索とともに、学内での連携、まずは医学部を軸とした、他学部との連携研究創出の仕組みづくりに着手した。

【段取り・プロセス】

（1）学内の合意形成を図る。

同じ大学内でも医学部と他理系学部との公式な研究交流会はなかった。

そこで、コーディネーターはまず産学官連携組織・新産業創生研究センター（以下センター）所長との「医学部と他理系学部との異分野連携研究推進のため、研究交流のプラットフォーム“創設へのコンセンサスのもと、医学部を初め、理系学部長を訪問し、当研究交流会創設への理解を求めたが、多くのアドバイスが得られ、会の企画、運営に参考となった。なお所長には関係学部長の紹介等、多くの支援を受けた。

（2）交流会開催企画を練る。

コーディネーターは交流会の骨子—医・工等連携研究の推進のプラットフォームを示し、組織内で論議、（1）と併せ約3ヶ月を掛け、企画骨子を決めた。

そのポイントは、①センターの主催、②各回毎にテーマ分野を決める、③シーズ発表（杉本地区・理系学部）3件、交流事例発表（医学部）1件、④情報交換会

（3）交流会開催運営。

コーディネーターは調整し、会場準備、周知等本部、医学部事務部門の協力、特に会場となる医学部（阿倍野キャンパス）の全面的支援を得る事となった。

（4）開催後フォローアップ（連携研究等アフターサービス）

交流会後の研究者間の情報交換、共同研究の具体化、競争資金公募への共同提案等々、センター全体として情報の一元管理を行なうこととした。

【成果・結果や活動後の変化】

学術的評価なしには最終ゴール（製品化等）へ到達できない理工学部の研究者にとっては、本スキームは大きな動機づけ、プラットフォームとなり、医学部との連携研究に前向きな意識が芽生えている。その結果として、連携研究のマッチング、研究会結成の動き、具体的に外部競争資金公募への医工連携による提案例も出てきた。

成功の事例

医工連携研究等交流成果が芽生えた

●両キャンパス間研究交流会を始めて開催！

医学部・附属病院と本部・他の理系学部（3学部）・文系学部（4学部）とは、キャンパスを異にしていることもあり、研究交流が活発とはいえなかった。

今回の「インターキャンパス研究交流会」の設置により、医学部研究者、工学・理学・生活科学部研究者双方にとって、医工等連携研究シーズ創造、育成のプラットフォームが出来たことになり、その意味は大きいと考える。

●研究会結成、競争資金公募への提案ができた。

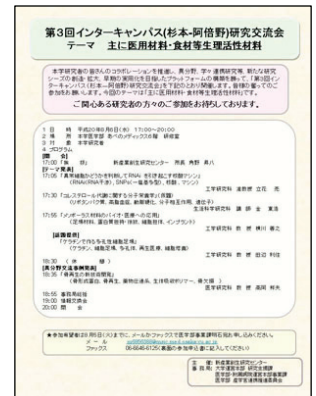
- ・第1回交流会（平成19年9月；テーマ分野 「医用材」、「機能性食材」、
- ・第2回交流会（平成20年2月；テーマ分野 「医療・評価機器、システム」
- ・第3回交流会（平成20年8月）；テーマ分野 「医薬・医用材」

第1回を開催後約1年半を経過し、連携研究ペアが多数、研究会結成の話に進んでいるペアもある。また、コーディネーターが最終目標とした連携研究による外部競争資金獲得では、すでに公募提案したペアは2例（平成21年度）を数える。

●交流会発表テーマのアフターフォローの徹底、一元管理。

上記のように成果が徐々に生まれつつあるが、大学コーディネーターを含めたセンター関係者全員で、連携研究情報を「一元管理」、フォローの徹底を期す。

新たな 連携へ



第3回案内ポスター

失敗の事例

研究者の連携研究ニーズ把握は十分だった

●参加の研究者の数が少ない。

3回を数える交流会の出席者は、10~20名程度とやや少なめであった。医学部外研究者の参加が限られていた。

- ・医学研究者への医学部以外研究者のシーズ提案の意味合いから、臨床系研究者（附属病院）の多い医学部の事情を考慮した交流会設定であった。
- ・場所：医学部・阿倍野キャンパス、・時間：17時~20時
- ・元来、医学部との連携研究ニーズのある研究者は限られている。これら医学部以外の研究者の研究シーズを調査、吟味し、連携研究シーズを把握すると共に、これら外研究者への開催周知の仕方を考えるべきだった。
- ・またテーマ分野によっては、開催場所を医学部・阿倍野キャンパスから杉本キャンパスに移して開催する事も必要であるかも知れない。

成功と失敗の 分かれ道

シーズの数は研究者の数程ある。その中で将来性、優劣を判断するのは難しい。目利きはあらゆる角度から判断するが、最後は研究者の確信と説得力である。

産学官連携の新たな展開に向けた提言

学内、広域異分野連携で外部資金獲得を

●学内研究交流会の両キャンパス・交互開催

医学研究者と、理・工・生活科学研究者との「インターキャンパス研究交流会」医工連携等異分野連携の拡がりを期待し、その開催場所を医学部キャンパス固定から、適正頻度の交互開催を考える。

●広域異分野研究交流への展開

本学医学研究者と他大学研究者との広域異分野交流は、すでに3大学と推進中であるが、学内連携研究を、これら広域異分野交流への活用、展開を模索する。

●競争資金獲得テーマ、プロジェクトの創造のための連携研究管理体制の構築

「インターキャンパス研究交流会」設立目的の原点である「外部資金獲得」のため、連携研究のフォロー等管理体制をさらに固める必要がある。

☆コーディネーターの一言

3人寄れば
文殊の知恵！
技術屋としては、なかなか他人には相談し難いものである。しかし、技術が高度に専門化・細分化された現代では、異分野の研究者との相談や連携が新しい知恵の源となる。